

氏名	坂本 由美 (サカモト ユミ)
本籍	福岡県
学位の種類	博士 (老年学)
学位の番号	博甲第 83 号
学位授与の日付	2018 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	高齢者のバランス能力に対する認識誤差の特性と 身体機能との関連

論文審査委員	(主査) 桜美林大学教授	新野 直 明
	(副査) 桜美林大学教授	渡 辺 修一郎
	桜美林大学教授	長 田 久 雄
	茨城県立医療大学教授	大 橋 ゆかり

## 論文審査報告書

### 論文目次

はじめに	1
第 1 章	
研究の背景	1
1. 高齢者の事故	1
2. 高齢者の転倒	1
3. 高齢者の身体機能認識	1
4. 高齢者の転倒恐怖感	2
5. 研究の意義と目的	2

6. 本論文の構成	2
第2章	
研究1. 高齢者の自己のバランス能力に対する認識誤差とその評価に用いる課題の特性	
1. 目的	3
2. 方法 (対象, 測定項目, 分析)	3
3. 結果と考察	4
第3章	
研究2. 地域在住高齢者の時間判断力について	
1. 目的	5
2. 方法 (対象, 時間評価, 分析)	5
3. 結果と考察	5
第4章	
研究3. 地域在住高齢者の身体機能とバランス能力の自己認識	
-転倒歴および転倒恐怖感との関連-	
1. 目的	6
2. 方法 (対象, 測定項目, 分析)	6
3. 結果と考察	6
第5章	
研究4. 高齢者におけるバランス能力に対する自己認識	
-他者の歩行速度に対する主観的判断による分析-	
1. 目的	7
2. 方法 (対象, 測定項目, 分析)	7
3. 結果と考察	7
第6章	
総合考察	8
文献	

## 論文要旨

本研究は比較的活動性の高い高齢者の自己のバランス能力に対する認識誤差と身体機能特性との関係を検討した研究である。

研究1では時間的・空間的バランス機能評価法の課題に対し、心的時間測定法のようにイメージ上の結果予測と実際の結果を比較することで認識誤差を調査するとともに、予測課題の質の違いによる認識誤差の特性を検討した。その結果、高齢者の認識誤差は課題の種類により影響を受ける可能性があり、認識誤差の評価に用いる課題としては、時間的予測課題、特に多重課題を含む課題の有用性が示唆された。

研究 2 では高齢者の時間判断力を調査し、認識誤差測定に用いた心的時間測定法への影響を検討した。30 秒の設定時間では高齢者の時間判断力に低下がみられたが、10 秒前後で実施可能な課題に対しては、心的時間測定法に対する時間判断力の影響は強くはないことが確認された。

研究 3 では転倒歴と転倒恐怖感の有無から対象者を 4 群に分類し、各群の身体機能と認識誤差を比較することで、転倒歴および転倒恐怖感と認識誤差との関係を検討した。転倒恐怖感と身体機能の間には有意な関係性が見られたが、転倒恐怖感と認識誤差、転倒歴と身体機能および認識誤差には認められなかった。しかし、障害歩行路を用いた課題において転倒恐怖感を有する群に認識誤差が増大する傾向が見られたため、高齢者の認識誤差は多重課題状況で生じやすいことや、転倒恐怖感、身体機能、認識誤差に間接的な関連性がある可能性が示唆された。

研究 4 では他者の歩行速度に対する主観的判断と、同課題における自身のパフォーマンス結果により高齢者を 4 群に分類し、認識誤差を有する高齢者の身体特性を検討した。ここでも転倒恐怖感と認識誤差の関係性が見られ、認識誤差が見られる高齢者はバランスに対する効力感が低く、身体機能が低い者ほど自身を過大評価する傾向がみられた。

総合考察では研究 1~4 を踏まえ、高齢者の認識誤差の評価に用いる課題や評価、誤差の傾向や転倒恐怖感との関連などを述べるとともに、本研究の限界と今後の課題について述べた。

## 論文審査要旨

提出論文について、主査および副査による数回の面談および書類による討議が実施された。その結果、高齢者の安全や活動性に深く関係するバランス能力に対する認識誤差に注目した本研究の老年学的意義は高いと判断された。第 1 章において、認識誤差についての詳細なレビューがなされている、研究 1 から 4 の各研究において、バランス能力、身体機能に関しても入念な測定がなされている、認識誤差の測定法に関する検討もなされている、測定結果の分析も工夫されている等の点で研究、論文の質も高く、独創性も十分にあると評価された。

以上から、本論文は博士論文としての水準を満たしているという判断がなされ、合格と判定された

## 口頭審査要旨

審査委員より、高齢者のバランス能力に対する認識誤差という興味深い問題に対し、様々な測定を含む 4 つの調査を実施し、分析法も工夫しながら結果を示した点で、価値のある研究という評価がなされた。

審査委員による質問に対しては適切な対応がなされた。具体的には、認識誤差の 2 種類

の測定法を用いた意味、高齢者の認識誤差に関する既存の研究結果との差異、認識誤差と転倒と転倒恐怖感の3者の関係について質問があった。認識誤差測定については、心的時間測定法は内的基準、他者との比較は外的基準による判断を測定する目的で実施したこと、既存の研究とは認識誤差の大きさや方向性の測定法・考え方などに異なる点があること、認識誤差と転倒恐怖感の関係が有意だったことが改めて説明された。論文の本文および表の修正を求めるコメントがあったが、内容の問題ではなく、表現上の微細な修正であり簡単に対応可能な指摘であった。なお、認識誤差が認知症の予測指標になる可能性、また、転倒予防への利用可能性について、今後さらに研究を深めてほしいという要望があった。

最終的に審査委員の全員一致で合格の判定がなされた。